



重修真書太閤記

初編

五

~13  
459  
5



18 特  
9 8  
459  
5

消  
福  
永

重修真書太閤記初編卷之十三

普請方人夫等惡心の事

并木下藤吉郎智謀乃事

同  
會  
攻  
印

木下藤吉郎秀吉と普請奉行を蒙りて大工左官日雇  
人足の棟梁等と役所へ呼出しや渡しけるに纒の修復小隊入  
御上れ氣色よろしくは是に依り某に奉行を仰付られし  
うの上意小三日の内に全く成就せしめよとあり輕うぬ  
思召我等の心は深く恐入たども御仕方をて三日の  
出来ばる譯あり依り今日いまづ休息をべしとて明日より  
三日を限りて出精し堀石垣の修理成就せむべし汝等定

大岡記の編卷十三

めく無射の下知と思ふべし然れども我心をせめてよく働  
さるばる更は無理の事にあらず當時戦國の事なるは武士  
云ふ及ばず百姓町人たりとも國主城主地頭の為なるん  
粉骨碎身しつゝの國その城下乃安穩あるべき様をおり  
願はるるなり然れども方より一人として清洲は妻子のなき  
ものやあるこの清洲へ敵の寄るとあはれその妻子まゝ安  
樂に渡せあるべきやよりありし然れども心を盡し力を極  
めく相働くべき筈の事なるは然も破損の場所ハ百間  
過ど堀の柱以下石垣大形下拵の出来しつゝ然者土臺と  
居柱立てて礎を付するまで堀一間分三人がかりして三百人  
から百間成就とすべし尤平日の並普請をば中食間食の

休息もあはれ十餘日もあはれべきもそれ一日あはれも  
十日の作料をばしつゝ間休息なり小働くべし  
延喜木工寮式は方丈壁一間塗工一人夫二人と云を以て  
積り立しとあはれ繪本は石垣一坪を修理せん夫三人  
左官一人外小手傳二人都合五人を用ひしとあり  
依り明日は常より少くもやく人夫をばせり役所は集まへし  
人数引け混雜をばる様の手配り等ハ明朝申渡さるべし明  
後日のともハ明日夕方方小下知とすべしと申渡すは棟梁等々の  
ても山口の下知幾日かりてもゆるしかり有し故無益  
とあり日數多くけ賃銀多く得んは成の事詮せしに  
三日の内は三十日分の得分を得んと又あはれと思ひ返し

顔を見合せ出来のほど、如何いん計りかごとく、いふも  
まげ御下知次第出精仕るべしと辭をとりて返答せし  
うば藤吉郎大に悦び神妙あり出精をよ萬事、明日沙汰  
とべし今日まづゆめく休息せよとてか下りたり、山口  
九郎次郎は代り奉行、猿冠者なりと聞きいふく  
怒り思ひむと、小大工の棟梁と呼よせ過分の金子を與へ汝  
等藤吉郎は何と云ともかやり、計らふべし然るに、我  
亦よさ小計らふべしと懇にやつて、けと、棟梁ども元より  
親しき山口と云か、鳴海城主の嫡男あり藤吉郎が  
新參卑賤なりと一様、准をさにあはれ、杯は忽ち是は荷擔  
し手下人夫どもへ惡事やめめたる、翌日早朝より役

所に出ても、心中も更小藤吉郎が付と信をばあり  
よ木下待つけ早めり、職人ども今日より出精をべし、  
昨日定めたる如く、一間は三人づかりて左右と入り、身  
と動くべし出精すべし、石運びの人夫は二百人付り、即一間  
小二人づゝ小使立廻り、れものも別小付り、大工の柱立に  
るべし、柱立たる貫を通し貫を通さば、棧をかくべし、棧出  
来せば、や左官土成ぬるべしと細や下知し、普請場  
操入るに職人ども、山口が中條は付く何とて、藤吉郎が  
妨とると思ひ、土臺石垣のよら、  
ワざと堀壊し、又いゆるが、石をむる震り、藤吉郎が  
や渡り、割普請の仕方は、更小か、藤吉郎を見て

悪る奴原が仕方は山口の内職人夫婦は示し合せて  
考知りて又是と嚴しく咎めんとせむ隙入多く  
請合の目限小出来とてくす然ハ我ま此のども  
欺きて山口が謀の裏をかくべしと思案し藤吉郎あれど  
知ざるなりて見廻り凡二分通りも出来たりとありし時  
拍子木をもちておの職人どもも休息させ役所へ呼寄  
汝等存外出精して我思ふより多分修理とゆえ我等も  
満足せり然るは只今上より御酒御肴を下されりしれい  
今日よりその方ども出精して三日の内は普請成就せむべし  
と御請中をいにより御機嫌と思召その方ども乃勤勞を  
あづむべしとの御惠なり難有奉存すべしとあり

厚く思召はるるこの國主の例あるべし汝等より  
思案とて何ゆゑなむかまて普請をいそがせむかんと  
なるは國主の城は百姓町人の倉廩之倉廩全くるけは盜  
を防ぐたより城修理せむれば敵とあせむは利あり今  
四方は強敵ありては當國を打取んと成望むたは  
上の御武勇とてほまは他國より斬今此城下忽は  
合戦の巷とるべし然る時先も中をせし如く汝等が  
妻子眷屬何とて安穩なるべしや然らば國主の城普請は  
汝等が從類と安穩なるべしめんとのと云へ汝等無負  
りても働くべしとていなるにその日くの賃銀米穀を賜ふこと  
何れどの御恩とおりにやそれのとあはれ又酒肴を賜り

何と實は父母の赤子とありしとあるに國主の御威光は城  
 地堅固あるにありたといふ赤子は丈夫は生育は母乃躰の壯健よ  
 よらるが如しとかき口説きまはさば職人どもも酒食の恩小感す  
 何と國主の御威光は城地の要害よりきにあるといふ誰れ  
 知らばり敵を防ぎて城下へよせつけば百姓町人の安泰なるを  
 云ふ及ばばその城がらんあるに國役もて作料を減し自身乃力  
 りて勤むるは我相應たれ然る小作料を増し賜り酒肴まで  
 下さるとは痛入るると思へるさぬ色ふありしと藤吉  
 郎得たりといひ職人どもをあふさなく銘持場とて  
 取からんともる処へましく藤吉郎出来り職人どもたかか承  
 るれ上より御朱印と下されり職人物躰八百人の内へ鳥目二百

貫文不時の御褒美とて被下いひ三日の内は修理成  
 就せめば鳥目と御替被下となりと申渡しけし棟  
 梁どもとて人夫まがばめて肝膽は銘難有くおひ  
 入後悔赤面の色を顯し我等愚昧なり國主の御恩を  
 思ひ御城乃堅固あるに我等が家居の用心と申すは更  
 心付む殊も先奉行山口殿の心入道あやさしとていざや  
 眞實出精して勤むべし一人に力を竭してこそ是非  
 三日の内は成就せむと汗水にありて働さるる藤吉郎  
 是を見りて心安し欲は迷ふ賤夫の常利は流るる方  
 の情も是と云るべし山口欺さるるも亦利と欲との二  
 らしと彼は以て君は背さしは以て君と敬ふ背くと敬ふ

その別天地と處てり

此段印本流布本數本と參考してその説の冗長

理は遠きことを除き事實は親しきことをのち後ふ二

貫文は當時の價米凡二百四十一石八斗三升余に當る

廿七文と多門院 二百四十一石八斗三升と八百人ふれば一人二斗

日記あるに由る 二合二勺八撮五抄余ありたり升小相違ありたり

別より 人夫等心を改め出精の事

并木下御朱印弑引替忠誠乃事

六十餘州と掌握して四百餘州と震恐せしむるなどの英才

あるに及ぶ藤吉郎が一時の權謀を破らんとす

山口が女姦計更を行くれど刺大工職人以下心とむるが

實意小粉骨碎身して働さしむる初日の薄暮を限り

と精を出し翌日未明小役所へはめつけ藤吉郎が下知と

遅しとまひりて藤吉郎いよく温和小めてふ今日ハ

あまりにやまづまづ休息せよ仕廻も急度申の事と

ア小休めよかと申渡せば人夫異口同音小答ゆるや

ども時を誤らさず少くも起出さば元來の急の

修理日數も定まりてゆへ願はくハ御許を蒙り場所小入

細工はかりやた安閑と手と虚しく罷在と却て迷惑

小覺ゆと所望せしは藤吉郎こそ持あめと心中は笑を

含えはく昨日の如く割普請の場所とて藤吉郎杖成

突々普請場と巡覽一聲とけ詞を和らげ褒称ありき  
大工職人いづれも志をいひ形息とも續もころりやふ  
半日けうらふ太半成就たり藤吉郎大悦び又拍子木を打  
職人を休息せしめ食事とあそび今日其方ども乃  
ころりき人間業とちおもれども實は忠誠乃至りばうり  
る一依る今朝よりの容子や上ひ処御感あるめらば又  
御酒御肴を下されり志り晝の内心せうねる女等もゆる  
やふおりのまどはまば今日いよく仕舞ゆめ酒宴とな  
く休息せよとや渡りけと職人一同よきもく難有上様  
うら我等御下は住居一面の家業仕り妻子を養ひい  
いさうの御用少くも勤るも乃事おれと格外の恩賞を被下

かろりの御普請を仕り昨日も御酒御肴を下さるのそ  
む鳥目二百貫文の御朱印まで被下ま今日も御酒御肴と  
被下との冥加のりとおそろく奉存いたし晝のり酒  
下はまは勤まさるりや仲間とて夜分快く頂戴仕  
きりと口にやたし食事とてや否休息もせ直小持場  
とちたへ取ゆると藤吉郎見分は汝等左様ありやうて  
身軀勞とて却て病を引出とてまづ緩く休息して其  
後取掛とて中渡をば人夫等家業よは少も苦勞も無  
くはあまのつは長休仕ゆは身痠く煩くは詞齊しく  
やたし再び仕事おろりけるもよまや柱も大形立終り  
庭を壁志と繩竹を持ちとび藤吉郎見巡りさし圖もせざる



うち大形こまひ掻終り實もつけまわら互よ力を  
いごみ々も怠慢もその一人もかく本意修理をたくは  
國主の恩は報いんと相り故鹿末の仕業に更にたく爰と  
大事と勤けとばつら二日めは屏のそらけ終り時  
藤吉郎も時刻あり休息をてと下知され棟梁共  
今すこし御猶豫被下下今日の細工のそりは明日の  
都合ありゆとてその日も終は薄暮まで力を限り  
らき藤吉郎が下知を用いむ手を休め急ぎくれ大工  
左官の仕業もや大分は出来せり日すてふ暮けは役所  
よび集め食事をお酒肴と勧め今日の働を賞しとて  
藤吉郎出座し其方ども今日の働格別のことありとて上の

思召殊の外よろしくまご御褒美あり二百貫文の御  
朱印を下されありあり可奉存と申渡して御朱印  
とてけしけし入夫共泪を流し悦び合はるもあはれ  
此廿日なかり空しく日數をくらぎ返るも恐怖しきことあり  
誠に以後悔臍をむむ益ありそれとも山口殿の下知は急  
ぐに及むとありつらとていりなり山口殿の了簡と  
御上の思召と雲泥萬里の相違今更山口の心中あやしく  
思召の形りなど不問談をもあはれ藤吉郎のそと  
更に聞ける面持を何氣あき躰めて今日乃働き神妙なり  
いり國恩をおりと教諭しけし入夫等仰の如く今日  
まご御普請怠り罪をばれ糾明もなり少くたより骨折りて

ゆきゆき厚き御褒美を下さるる何となく御恩を報じ奉るべきせめて今夜亥の刻まで働き翌明月中は皆出来仕るべしと望むける藤吉郎は御恩を報りし志ははるる程左様の夜まで働きては鍔石の身なりも勞まらぬ程しと云ふ夜普請は松明を用ひし松明は手誤の怒りもあるべし然らば今日の骨折も無なるべし平に今夜ハ休息と云ふと制しける

印本は腕木と云ふ松明をもつけ置とあるは夜普請を課せしと云ふは又尾州は夜普請松明の製法を傳へ太閤清洲普請の傳と云ふは夜分も有けるよや人夫等得心しと云ふ夜の宿所はゆきゆきも翌日の早朝

より詰りけるや仕事を取らんと勇まらる故藤吉郎今日は大工等の矢倉の仕組まかりし左官等の壁をぬり人夫と云ふの手傳とあるはゆきゆき精出ししと下知を

此比の矢倉といふ今の作事と大小異なり塀の上は柱を立てる四方小楯と搔並べ雨覆ひとせし追々但弓と彎小便よきせしゆきゆきのさるるは今時の矢倉と一様と思ふことあり

大工左官等と云ふ職人等今日中も皆出来と云ふは合定の如く成就してたゞ處に壁の上ぬりの残るは是の壁はゆきゆきあるがゆきゆきと云ふは苦しいゆきゆき藤吉郎巡見し残る處をいしゆきゆきもあたりゆきゆきと云ふ國恩報謝の

かごとくともあるべし神妙くと褒稱たりたり爰織田  
殿ハ木下が三日の請合今日限りあり如何なりきるやらん見  
物きこむやと夕方小性衆をうりまづるは召供一外曲輪へ  
あせせりしは百間餘の破損場もく出来一堀石垣櫓造  
まじりしは立はる孫實小三日の日限相違なく成就せしこと  
不思議なれと感歎せしは役所へ入る藤吉郎を召出扱  
神速に成就たりたり全く其方心頭より出大功なりと褒美  
有しは藤吉郎平伏一是全某が功ありは偏君の御威光  
よやく人夫等粉骨碎身仕仕故は左もあは何ごとく三日の内小  
成就仕るんやあは棟梁ども御詞下されしは信長  
の思ひと思はるは棟梁どもと藤吉郎を呼出させは棟梁共

御前より出まは信長御聲たり此日の骨折大儀なりと宣ふ  
大工與右衛門と云々の清洲小住居をりて家清洲堀普  
請の時藤吉郎の取次より信長は御目見あり御直々御褒  
詞を蒙り御道服を賜りて今小所持する由あり  
織田殿藤吉郎も厚く褒稱ありて本城へ還御はす熟思  
案ありけり初初如くなり居て中々五日十日の際小皆出来  
まじりしは然るをかくの如く神速に終るるといふある  
方便をうあはんとむそは人を出して窺はせたり小仰を受  
一日はづの休息させその翌日より三日の間晝の食をあは夕  
方ふまのれは酒肴をあは休息させ一趣も荒く聞えりといふ  
あは智謀と云才器と云並の者なりと感思召たり此

日ハ大工職人等も約定の如く普請三日ニ成就しこゝに織田  
殿の御目見と許され御直の褒詞を蒙りて職分に取  
面目といひ當時の外聞といひ大悦なり形の上成就の悦乃  
酒に酔ひ思ひくは舞さうぎて家へ立歸りけるのら藤吉郎  
はらの御朱印引替れに心勞しける折に織田殿今度藤  
吉郎が計策無双なりとて御感の餘り百貫の知行加増を賜  
たりける

百貫文の知行とて年貢錢百貫文納むる地之當時百貫文  
の錢ハ米百廿石の九斗一升五合と買べし今之知行ハ  
あゝ四物成三百〇二俵二分八釐余ニ當ると知へし  
池田庄三郎信輝仰を取次知行の書出と渡りける時藤吉郎

池田と以て中上々ハ加増の義面目の至り過分の悦び恐入  
奉存ありしるが書出二三三年さ上置や度奉存ハ  
その代りさ々只今二百貫文の鳥目拜借仕さ左に廣  
大乃御恩あるべしと織田殿聞召加増ハ侍らるもの望ひ処  
鳥目ハ眼前の利潤といひも武士の望はあはれ子細あはれ  
思はれりとも恩賞のさあはれ所望は酒を鳥目二百貫文  
と賜りしるが百貫文の知行書出と預り置とけり  
藤吉郎ハ大悦ひこれと請取置々々大工棟梁共ハ御恩  
報し小働さやべしと申さし詞もあはれ早速は御朱印引替  
のさし中出がさ四五日経る處へ藤吉郎より明日御朱印  
持参仕り鳥目と引替やべしと觸りしるが棟梁等大悦

刻限たがば藤吉郎が宅へて集るやぐて藤吉郎面會一  
君より給くる鳥目二百貫文請取置より謹く頂戴とて  
たゞ御朱印二度都合四百貫文あれども御軍用さうり  
ひ入れあるよまて二百貫の表へ百貫文つ下され残り追不  
小被下べ依るやぐ二通乃御朱印とさう上べさすれ汝等  
も又御軍用の手傳やせ道理こと中渡を棟梁共異義  
那く二通の御朱印とさう上二百貫文と請取ありがさひ  
厚く御禮やて退去せしと

此條も諸本大同小異詞の多寡あるが今その中と  
擇く鈔取と

重修真書太閤記初編卷之十三終

重修真書太閤記初編卷之十四

木下藤吉郎良策を獻むる事

并森三左衛門商人とあり笠寺へ赴く事

權を以て人と怖をば恐とて伏すと云ども反も早  
く眞實の事あり智信を以て人と伏せむと誠心を以  
て是れ小従い反も事となく幸福多しと云り去バ木下藤  
吉郎人夫が惡心といふは却て智を以て利害を示し恩を  
以て教諭を以ては八百人夫等忽誠心を顯して歸伏し  
働さるるを以て三日の内よ普請全く成就しけむ織田殿  
とて家中乃諸士一同木下が計策智謀の凡あつるを

感<sup>ん</sup>トける<sup>ん</sup>叔<sup>しやく</sup>又<sup>また</sup>織<sup>お</sup>田<sup>た</sup>殿<sup>でん</sup>より恩<sup>おん</sup>賞<sup>しょう</sup>と<sup>り</sup>賜<sup>たま</sup>はる<sup>る</sup>百<sup>ひゃく</sup>貫<sup>くわん</sup>文<sup>ぶん</sup>乃<sup>の</sup>  
知<sup>ち</sup>行<sup>ぎやう</sup>と引<sup>ひ</sup>替<sup>か</sup>たり<sup>り</sup>二百<sup>にひゃく</sup>貫<sup>くわん</sup>文<sup>ぶん</sup>の鳥<sup>とり</sup>目<sup>め</sup>と一<sup>いち</sup>錢<sup>せん</sup>も身<sup>み</sup>に付<sup>つ</sup>む御<sup>ご</sup>朱<sup>しゆ</sup>  
印<sup>いん</sup>と引<sup>ひ</sup>之<sup>の</sup>職<sup>しやく</sup>人<sup>にん</sup>共<sup>ども</sup>渡<sup>わた</sup>り皆<sup>みな</sup>濟<sup>せい</sup>せり<sup>り</sup>也<sup>なり</sup>も三日<sup>さんじつ</sup>の間<sup>あひだ</sup>あへ<sup>へ</sup>り<sup>り</sup>  
酒<sup>しゆ</sup>肴<sup>やく</sup>もと<sup>と</sup>藤<sup>とう</sup>吉<sup>きち</sup>郎<sup>らう</sup>自<sup>じ</sup>身<sup>しん</sup>の力<sup>ちから</sup>を以<sup>もつ</sup>て賄<sup>まわ</sup>ひ<sup>ひ</sup>り<sup>り</sup>お<sup>お</sup>り<sup>り</sup>こ<sup>こ</sup>づ<sup>づ</sup>う<sup>う</sup>  
三十<sup>さんじゆ</sup>石<sup>せき</sup>の分<sup>ぶん</sup>限<sup>げん</sup>まで八<sup>はち</sup>百<sup>ひゃく</sup>餘<sup>じゆ</sup>人<sup>にん</sup>の<sup>もの</sup>共<sup>ども</sup>四<sup>よ</sup>度<sup>ど</sup>あ<sup>あ</sup>へ<sup>へ</sup>り<sup>り</sup>酒<sup>しゆ</sup>の價<sup>あひ</sup>を  
かり<sup>かり</sup>も<sup>も</sup>た<sup>た</sup>や<sup>や</sup>を<sup>を</sup>く<sup>く</sup>ば<sup>ば</sup>い<sup>い</sup>う<sup>う</sup>お<sup>お</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>聞<sup>き</sup>小<sup>せう</sup>舅<sup>きう</sup>の又<sup>また</sup>右<sup>みぎ</sup>衛<sup>ゑ</sup>門<sup>もん</sup>福<sup>ふく</sup>有<sup>いう</sup>の者<sup>もの</sup>  
ある<sup>ある</sup>故<sup>ゆゑ</sup>内<sup>うち</sup>意<sup>い</sup>を<sup>を</sup>かり<sup>かり</sup>合<sup>あ</sup>せ<sup>せ</sup>借<sup>か</sup>用<sup>よう</sup>を<sup>を</sup>り<sup>り</sup>お<sup>お</sup>り<sup>り</sup>

試<sup>し</sup>小<sup>せう</sup>此<sup>こ</sup>酒<sup>しゆ</sup>を<sup>を</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>小<sup>せう</sup>一<sup>いち</sup>人<sup>にん</sup>平<sup>へい</sup>均<sup>くわん</sup>五<sup>ご</sup>合<sup>がふ</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>て八<sup>はち</sup>百<sup>ひゃく</sup>人<sup>にん</sup>ハ四<sup>し</sup>石<sup>せき</sup>なり  
その酒<sup>しゆ</sup>四<sup>よ</sup>度<sup>ど</sup>あ<sup>あ</sup>れ<sup>れ</sup>ば<sup>ば</sup>十<sup>じゆ</sup>六<sup>ろく</sup>石<sup>せき</sup>お<sup>お</sup>り<sup>り</sup>四<sup>し</sup>斗<sup>と</sup>入<sup>い</sup>り<sup>り</sup>こ<sup>こ</sup>づ<sup>づ</sup>う<sup>う</sup>四十<sup>しじゆ</sup>樽<sup>たん</sup>なり<sup>なり</sup>看<sup>かん</sup>  
これ<sup>これ</sup>は<sup>は</sup>准<sup>じゆん</sup>ぶ<sup>ぶ</sup>べ<sup>べ</sup>飯<sup>い</sup>も<sup>も</sup>ま<sup>ま</sup>こ<sup>こ</sup>一<sup>いち</sup>人<sup>にん</sup>二<sup>に</sup>合<sup>がふ</sup>五<sup>ご</sup>勺<sup>しやく</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>て八<sup>はち</sup>百<sup>ひゃく</sup>人<sup>にん</sup>二<sup>に</sup>石<sup>せき</sup>と<sup>と</sup>め  
飯<sup>い</sup>四<sup>し</sup>度<sup>ど</sup>あ<sup>あ</sup>れ<sup>れ</sup>ば<sup>ば</sup>八<sup>はち</sup>石<sup>せき</sup>と<sup>と</sup>用<sup>よう</sup>も<sup>も</sup>四<sup>し</sup>斗<sup>と</sup>入<sup>い</sup>廿<sup>にじ</sup>俵<sup>ひょう</sup>なり

然<sup>しか</sup>る<sup>る</sup>は<sup>は</sup>織<sup>お</sup>田<sup>た</sup>殿<sup>でん</sup>藤<sup>とう</sup>吉<sup>きち</sup>郎<sup>らう</sup>が<sup>が</sup>二<sup>に</sup>百<sup>ひゃく</sup>貫<sup>くわん</sup>文<sup>ぶん</sup>を<sup>を</sup>所<sup>しよ</sup>望<sup>ぼう</sup>を<sup>を</sup>り<sup>り</sup>何<sup>なに</sup>故<sup>ゆゑ</sup>ぞ<sup>ぞ</sup>心<sup>こころ</sup>得<sup>え</sup>  
が<sup>が</sup>こ<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>密<sup>ひそ</sup>に<sup>に</sup>聞<sup>き</sup>せ<sup>せ</sup>ら<sup>ら</sup>れ<sup>れ</sup>る<sup>る</sup>は<sup>は</sup>二<sup>に</sup>百<sup>ひゃく</sup>貫<sup>くわん</sup>文<sup>ぶん</sup>ハ<sup>ハ</sup>夫<sup>つま</sup>ども<sup>も</sup>分<sup>ぶん</sup>與<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>より  
して四<sup>よ</sup>度<sup>ど</sup>酒<sup>しゆ</sup>食<sup>じやく</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>へ<sup>へ</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>す<sup>す</sup>て落<sup>お</sup>ち<sup>ち</sup>も<sup>も</sup>な<sup>な</sup>く<sup>く</sup>聽<sup>き</sup>え<sup>え</sup>り<sup>り</sup>こ<sup>こ</sup>づ<sup>づ</sup>う<sup>う</sup>ハ<sup>ハ</sup>織<sup>お</sup>田<sup>た</sup>殿<sup>でん</sup>  
あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>小<sup>せう</sup>感<sup>かん</sup>歎<sup>たん</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>凡<sup>おほ</sup>奉<sup>ほう</sup>行<sup>ぎやう</sup>する<sup>る</sup>もの<sup>もの</sup>聊<sup>い</sup>も<sup>も</sup>私<sup>し</sup>欲<sup>よく</sup>あ<sup>あ</sup>き<sup>き</sup>と<sup>と</sup>最<sup>さい</sup>得<sup>え</sup>  
が<sup>が</sup>こ<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>藤<sup>とう</sup>吉<sup>きち</sup>郎<sup>らう</sup>お<sup>お</sup>の<sup>の</sup>と<sup>と</sup>利<sup>り</sup>を<sup>を</sup>ば<sup>ば</sup>費<sup>ひ</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>と<sup>と</sup>ば<sup>ば</sup>主<sup>しゆ</sup>家<sup>か</sup>の<sup>の</sup>た<sup>た</sup>め<sup>め</sup>は<sup>は</sup>自<sup>じ</sup>  
身<sup>しん</sup>を<sup>を</sup>忘<sup>わ</sup>し<sup>し</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>近<sup>きん</sup>世<sup>せ</sup>無<sup>む</sup>双<sup>じゆう</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>べ<sup>べ</sup>り<sup>り</sup>二<sup>に</sup>百<sup>ひゃく</sup>貫<sup>くわん</sup>の<sup>の</sup>鳥<sup>とり</sup>目<sup>め</sup>と<sup>と</sup>壹<sup>いち</sup>錢<sup>せん</sup>も<sup>も</sup>身<sup>み</sup>に<sup>に</sup>付<sup>つ</sup>  
付<sup>つ</sup>ば<sup>ば</sup>不<sup>ふ</sup>殘<sup>ざん</sup>諸<sup>しよ</sup>職<sup>しやく</sup>人<sup>にん</sup>ども<sup>も</sup>割<sup>わり</sup>與<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>中<sup>ちゆう</sup>尋<sup>じゆん</sup>常<sup>じやう</sup>の<sup>の</sup>もの<sup>もの</sup>な<sup>な</sup>し  
得<sup>え</sup>が<sup>が</sup>こ<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>處<sup>こ</sup>り<sup>り</sup>又<sup>また</sup>小<sup>せう</sup>身<sup>しん</sup>を<sup>を</sup>上<sup>あ</sup>げ<sup>げ</sup>て<sup>て</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>莫<sup>な</sup>太<sup>た</sup>の<sup>の</sup>費<sup>ひ</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>と<sup>と</sup>ば<sup>ば</sup>  
諸<sup>しよ</sup>職<sup>しやく</sup>人<sup>にん</sup>ハ<sup>ハ</sup>酒<sup>しゆ</sup>飯<sup>い</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>へ<sup>へ</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>聞<sup>き</sup>棄<sup>す</sup>る<sup>る</sup>は<sup>は</sup>置<sup>お</sup>き<sup>き</sup>て<sup>て</sup>一<sup>いち</sup>百<sup>ひゃく</sup>貫<sup>くわん</sup>文<sup>ぶん</sup>の  
知<sup>ち</sup>行<sup>ぎやう</sup>當<sup>たう</sup>年<sup>ねん</sup>の<sup>の</sup>物<sup>もの</sup>なり<sup>なり</sup>全<sup>ぜん</sup>く<sup>く</sup>下<sup>くだ</sup>さ<sup>さ</sup>る<sup>る</sup>べ<sup>べ</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>渡<sup>わた</sup>ら<sup>ら</sup>れ<sup>れ</sup>る<sup>る</sup>ハ<sup>ハ</sup>藤<sup>とう</sup>吉<sup>きち</sup>郎<sup>らう</sup>  
重<sup>おも</sup>難<sup>な</sup>有<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>仕<sup>し</sup>合<sup>あ</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>い<sup>い</sup>く<sup>く</sup>御<sup>おん</sup>礼<sup>らい</sup>を<sup>を</sup>て<sup>て</sup>拜<sup>らい</sup>領<sup>りやう</sup>を<sup>を</sup>時<sup>とき</sup>は<sup>は</sup>藤<sup>とう</sup>吉<sup>きち</sup>郎<sup>らう</sup>と<sup>と</sup>憎<sup>にく</sup>

一とありの輩、藤吉郎二百貫文と諸職人は割與えしこと  
上へや上は私に二百貫文の御朱印代出せし故より、此事顯  
るはばその身安穩なるは依り替へ命替りともべし  
酒肴と人夫はあさるも蛙の口々のまると云たとの通り  
三日切と請合し普請故万一日限相違しは是も一身の安危は  
あさると然し何ぞ彼が功するんや御加増の百貫文いかどが  
骨折代と云べけれどもあし形が危いことあさるなり萬一  
人夫等彼がてねんよの三日限小出来とほぐ彼が出すぎ  
の罪とありし困窮さるる幸にふ時宜を得しは幸運と  
云へ實も身と棄るるやうむ瀬もあれは是なりと嘲り  
笑ひ遂に織田殿の御前も漏聞え或は此趣を讒言れ人も

ありしとども織田殿さるる動さ玉と藤吉郎御加増  
の百貫を以て藤井が貸する錢とほぐのい残るとは職人どもへ  
割與え先日の不足を補ふとや渡せし職人どもやさし驚き  
先日の二百貫文とて事濟しとせし斯下行きと一錢たり  
ともたのん乃ち得まきとと木下が誠心廉直なる處を  
稱美しは是ます誰れもあし織田殿の耳よりし先  
藤吉郎と讒言せしもの共と呼と面より聞へし藤吉郎が無  
欲のあらむ如く我は沙汰せし朱印と與えしと罪ある  
に似されごとと國家にせし元忠心より出しとてた  
軍の場は臨ん兵を勵と策と同一あることなげ我後小拜  
領せし百貫文を以て借財と濟し餘分を以て又職人に與えし

と我企及及びと語りて語らば讒言を人々も恐  
入るぞ退出

此頃木下藤吉郎小牧山の立木と數えり繪本太閤  
記に見えりその仕方繩の員と定め置との繩を以て  
立木一本づつと結むをられ繩の残りも算へ立木何千  
本と知し法あり

爰小山口九郎次郎いり共相違し普請い首尾よく  
成就し是は義元上洛の時清洲を攻落とべりと内通せしと  
虚しくあるのとならば結句織田殿の御前首尾よく獨不快  
くて有けると木下藤吉郎むと探り知しれを織田殿に言  
上せんとありども小身のものと云輕き勤るを御前へ出る

ともたまさか急言上をなしたる形は是に於て  
藤吉郎茶道小をより茶を點て進りたるにその服は他と  
異ありかども織田殿更に異なりと云はる茶道の能あり  
とおのひ居らる一人の茶道は藤吉郎が點てては中  
上り信長ありきと思はれり猿かやと茶道は達し  
たるにあやけは藤吉郎が點てては御前まで  
點けるよその服加減といひ所作といひ殊勝ありほとよ  
織田殿も深く感徳いなり

織田殿太閤ともに紹鷗の門人と茶人傳小見えり紹鷗  
は永禄元年十月晦日没を信長公廿五歳太閤廿三歳乃  
時なり



然るに藤吉郎とみくむ輩織田殿へ訴へたるに藤吉郎は茶を  
 奉るの時まづおのれ一口飲み其跡をさげやると讒言  
 けるまぞ信長大いり我に吞ざり成與へると奇怪とて  
 即時小藤吉郎を召よせ大に怒り罵られんとバ藤吉郎少も  
 恐む平伏して仰の如く吞さると獻しゆと相違なくおそれ  
 かぐ君も天下統一統の思召ありと察し奉りは故斯の如く侍  
 るゆり一實小四海を并吞し萬民を鎮撫せんとおがめゆ  
 たる藤吉郎が飲さると召上らるるべし但尾州一國の主あり終  
 らせむとんとおがめゆゆ藤吉郎が無禮を責む鉄鉞乃  
 誅のがら小処をゆいゆとせと御賢慮小するにゆとまら  
 織田殿いりと止めとの故いゆと尋むに藤吉郎御近習と

ゆとゆい被下ゆと密に言上仕るるさふゆとゆと織田殿  
 去るゆと近習とらとせゆに藤吉郎は側ちる居りて  
 山口左馬助同九郎次郎當方へ降参仕りゆゆゆと心底た  
 今川義元の先手と仕り上洛の道を開くととるゆはたなり某  
 よゆゆと心と付と伺ひゆ小既よゆゆと露見仕りゆゆゆと  
 身鳴海は在城仕ゆ間九郎次郎と當御城下へ出仕させゆと反  
 間のゆめゆゆゆに九郎次郎普請の奉行とゆ時職人ゆゆに  
 隙と入ゆゆと中付義元出馬の時當御城の修理届さ不申ゆ  
 やゆゆとはゆゆゆ由件の人夫職人等がとゆ語りたりとゆ  
 一と悉く告奉りか折節山口が奸計茶道と外膳夫と  
 も届きあゆと覺ゆに何とにゆゆゆ上りゆとゆ大切ゆと

をはるべくと存付てはへども朝夕の御膳は鬼と仕ゆとの定  
 まりくゆい氣遣はちも御茶なうりて鬼の  
 をのいも定まりなく故某存付ゆかく仕りてはたうり  
 天下乃御望あらんよ大切の御身之謹く御用心あるべきに  
 ひくばやこ中織田殿も明察の良將とてはうませばその旨と  
 さしきさぬい汝の中條その理よく聞えり我よく謹て是成  
 は守守るべし汝いよく怠るとさうれ山口が反心の條されりや  
 是を知り汝氣遣ふとさうれと宣へば藤吉郎謹く恐るる  
 ち中上ゆひとすこやく小間召とけらとゆと近比難有仕  
 合わゆ山口が事さうり小思召つれさうり先以安心仕るは  
 然いまづこのまふ御捨置あせさうり味方は於て又用ふ

べささ処もゆいんり山口父子今川は屬しゆも知多の郡もさ  
 悉く御敵とありゆべ

知多郡の士と云い常滑の水野監物直盛内海の佐治備中  
 守為繩などとゆめ岡田の一色右衛門尉範重阿古居の  
 久松佐渡守俊勝なるもの類なり

又今川家の諸士鳴海近邊は城をめぐり楯籠りゆい尾州八郡  
 と中内一郡は今川は押領せらるるも同前よては就中笠寺の  
 若よさゆり居ゆとの戸部新左衛門豊政と号し義元無二  
 の忠臣之知謀といひ勇略といひ拔羣はとの山口左馬助今  
 味方小屬するといひも内心今川家よある證據は鳴海と笠寺  
 とつづま廿餘町とゆべさうりも笠寺は清洲にうりて近

その戸部を扱ひたすふ事、置かざら全く駿河と同意する  
が故と聞えりゆれども表向に駿河は従ふ躰小見をて義元  
の消息を告奉らんるご云い全く君を欺さ奉る方便之然と  
ども今まげ左馬助がらるる小従く此方にて計略を用ひ笠寺  
乃戸部新左衛門と云いその若と奪ひ取とのち山口父子と  
討捕ゆと義元お来るとも足たまりおくて味方たさるる  
利あるべしと申けり道理いさるるおまこと戸部をばいふて  
討取べきと問ふに藤吉郎いしく戸部は名譽の能書少く手  
跡まざるかと云い是を以て謀事のためとてかやうくよ  
仕らるれが落命掌の内よゆとさうやきくろよぞ信長大ふ感  
トぬひ秘とべりく我らるるは是を以て戸部を討取べしと

悦喜かたりおく密ひそかに示し合せ藤吉郎は退出と其後織田殿  
森三左衛門可成と召出し汝おんちいりあもして笠寺へ赴き戸部が  
反故とめめおとべしと隠密かくしに下知ありしは三左衛門  
こまりて密意をうけ商人の姿よやけり笠寺の城中お赴き  
高たかひとをりたり  
森三左衛門可成は八幡殿の六男森冠者義隆の子孫  
中頃の祖三左衛門泰家といひしは土岐伯耆守頼貞よりさだの屬  
しく美濃國に住し泰家九代越後守泰政やすまさは土岐兵部  
大輔定明さだあきらの屬し天文十一年土岐左京大夫頼藝よりあき長井新九  
郎政利まさとしと合戦の時戦死を泰政嫡子三左衛門可成たり  
可成たりとのちどは土岐殿亡びく美濃國に主ふけり

大日本書紀卷之...

止るを得ず齋藤山城守が手に屬せしやうも後織田殿  
小仕えしと云

商いもの随分下直りりかば中間足輕等の氣入後ハ役  
人までも三左衛門が持行しものを買けるやうに鬼角一  
日數ある間よしの馴ることも形くあさしく語らひよりて  
戸部が手跡をおりひれまに求め得るなりその手跡幸  
書翰なり々れが大に悦び鬼の頭得し心地して清洲小で歸  
り織田殿に奉る織田殿の外悦むれ三左衛門がたゞらきと  
厚く褒美あり後い々り

木下が智戸部新左衛門を害する事  
并山口左馬助笠寺の砦攻不事

森三左衛門可成身を商人よやけし笠寺の砦に入し戸部新  
左衛門が手跡を求め得る織田殿に奉る織田殿これを家人の  
内より筆法成得しものを撰み出して習せらるる數日  
あつばしておの功成就し點畫真ませぬるほどなり々れ  
織田殿すむら文章を好し一封の書翰をたゞめさせらる  
その意趣戸部新左衛門先達てより織田家無二の懇意  
るまじとも山口左馬助父子今川の旗下よて飯織田家へ歸  
降し九郎次郎を清洲遣し置け城中的様子伺ひ今川家  
へ告知せん為るゆ間そこも御油断あるべくは乍然後日味  
方の計策不用ある処もゆべれまづ此まにあり置きて然る  
處折もゆべり笠寺へ左馬助を招きよせ酒宴の席あり討

とていへばく左もゆくと智多郡の城持をたぐめ大々御味  
方小屬一やへ今川たぐい討くのなるとも更恐るるに  
たぐど此と今志むの向よへ御油断なく御手配いべ  
と書ある戸部新左衛門より柴田權六佐久間右門方充  
たりまこ此外は山口九郎次郎が書簡と作らせらる是は九郎  
次郎より父左馬助へ送る文躰とてその意は戸部新左衛門が  
書翰と奪ひ取らる遣る躰ありて新左衛門が手簡と  
は錦のふくの中へ縫ふその中へ九郎次郎が書翰をもぬひ  
くら外よりそれとてさるるやうにありそのふくはものを包  
その上とまると別の絹にて包む九郎次郎より父へいさう物  
を送り遣る躰ふくたぐ一筆の書翰を副たりて藤吉郎

と呼出しそれを山口が使の小者に出立せし藤吉郎はう  
ててが掌の中へ九郎次郎が手きて絹とてさくに父の刀をうと  
記したり藤吉郎支度そのいかに件のふくは包茂請取て  
直は鳴海の城小至り九郎次郎の使と称し山口左馬助小件の  
包を渡すれば左馬助が子乃使とて呼入自身出逢て  
文茂むきと何と密事あるとありへどもたぐ一通り乃  
書翰のこもて外は何と包を開きこれ錦のふくさ  
よ包みそのありと更いさうこれ音物も形し左馬助いさう  
ふんげは使の藤吉郎を見て外は口状とてあきやと問はん  
とて一処へ掌を出し示すれば左馬助よと見ると絹とけくよ  
父の刀をぬくとありとて左馬助その意を得く上包のこぬと

解<sup>と</sup>り<sup>き</sup>中<sup>ちゆう</sup>る<sup>る</sup>錦<sup>きん</sup>と切<sup>き</sup>ほ<sup>ほ</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>ば<sup>ば</sup>と<sup>と</sup>て<sup>て</sup>二<sup>に</sup>通<sup>つう</sup>の<sup>の</sup>書<sup>しよ</sup>翰<sup>くわん</sup>あり  
ま<sup>ま</sup>じ<sup>じ</sup>九<sup>く</sup>郎<sup>らう</sup>次<sup>じ</sup>郎<sup>らう</sup>の<sup>の</sup>書<sup>しよ</sup>狀<sup>じやう</sup>と<sup>と</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>戸<sup>こ</sup>部<sup>ぶ</sup>新<sup>しん</sup>左<sup>さ</sup>衛<sup>ゑ</sup>門<sup>もん</sup>が<sup>が</sup>使<sup>し</sup>と<sup>と</sup>捕<sup>とら</sup>へ<sup>へ</sup>  
此<sup>こ</sup>狀<sup>じやう</sup>と<sup>と</sup>得<sup>え</sup>て<sup>て</sup>趣<sup>しゆ</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>た<sup>た</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>新<sup>しん</sup>左<sup>さ</sup>衛<sup>ゑ</sup>門<sup>もん</sup>が<sup>が</sup>書<sup>しよ</sup>狀<sup>じやう</sup>と<sup>と</sup>成<sup>な</sup>れ<sup>れ</sup>ば  
信<sup>しん</sup>長<sup>ちやう</sup>へ<sup>へ</sup>懇<sup>こん</sup>意<sup>い</sup>して<sup>して</sup>時<sup>じ</sup>節<sup>せつ</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>ち<sup>ち</sup>我<sup>われ</sup>と<sup>と</sup>討<sup>う</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>記<sup>き</sup>り<sup>り</sup>たり<sup>り</sup>左<sup>さ</sup>馬<sup>ま</sup>助<sup>すけ</sup>  
大<sup>おほ</sup>に<sup>に</sup>驚<sup>おど</sup>き<sup>き</sup>怒<sup>い</sup>り<sup>り</sup>あ<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>新<sup>しん</sup>左<sup>さ</sup>衛<sup>ゑ</sup>門<sup>もん</sup>が<sup>が</sup>仕<sup>し</sup>業<sup>ごう</sup>と<sup>と</sup>な<sup>な</sup>れ<sup>れ</sup>ども<sup>ども</sup>此<sup>こ</sup>書<sup>しよ</sup>我<sup>われ</sup>  
子<sup>こ</sup>九<sup>く</sup>郎<sup>らう</sup>次<sup>じ</sup>郎<sup>らう</sup>が<sup>が</sup>手<sup>て</sup>に<sup>に</sup>入<sup>い</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>無<sup>む</sup>限<sup>げん</sup>幸<sup>さう</sup>な<sup>な</sup>れ<sup>れ</sup>と<sup>と</sup>大<sup>おほ</sup>に<sup>に</sup>悦<sup>え</sup>び<sup>び</sup>九<sup>く</sup>郎<sup>らう</sup>次<sup>じ</sup>郎<sup>らう</sup>  
へ<sup>へ</sup>返<sup>へん</sup>事<sup>じ</sup>の<sup>の</sup>如<sup>ごと</sup>く<sup>く</sup>認<sup>ま</sup>め<sup>め</sup>あ<sup>あ</sup>と<sup>と</sup>藤<sup>ふじ</sup>吉<sup>きち</sup>郎<sup>らう</sup>と<sup>と</sup>口<sup>くち</sup>狀<sup>じやう</sup>小<sup>せう</sup>我<sup>われ</sup>身<sup>み</sup>の<sup>の</sup>惱<sup>なや</sup>  
大<sup>おほ</sup>切<sup>き</sup>あり<sup>り</sup>と<sup>と</sup>不<sup>ふ</sup>日<sup>じつ</sup>小<sup>せう</sup>全<sup>ぜん</sup>快<sup>かい</sup>と<sup>と</sup>一<sup>いつ</sup>件<sup>けん</sup>の<sup>の</sup>一<sup>いつ</sup>義<sup>ぎ</sup>更<sup>さら</sup>は<sup>は</sup>機<sup>き</sup>遣<sup>せん</sup>い<sup>い</sup>小<sup>せう</sup>及<sup>およ</sup>  
む<sup>む</sup>と<sup>と</sup>返<sup>へん</sup>答<sup>たう</sup>と<sup>と</sup>な<sup>な</sup>れ<sup>れ</sup>ば<sup>ば</sup>藤<sup>ふじ</sup>吉<sup>きち</sup>郎<sup>らう</sup>清<sup>せい</sup>洲<sup>しゆ</sup>へ<sup>へ</sup>と<sup>と</sup>歸<sup>かへ</sup>り<sup>り</sup>織<sup>お</sup>田<sup>でん</sup>殿<sup>でん</sup>と<sup>と</sup>注<sup>ちゆう</sup>進<sup>しん</sup>を<sup>を</sup>  
戸<sup>こ</sup>部<sup>ぶ</sup>新<sup>しん</sup>左<sup>さ</sup>衛<sup>ゑ</sup>門<sup>もん</sup>が<sup>が</sup>謀<sup>まう</sup>書<sup>しよ</sup>の<sup>の</sup>め<sup>め</sup>と<sup>と</sup>命<sup>めい</sup>と<sup>と</sup>落<sup>お</sup>と<sup>と</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>甲<sup>かう</sup>陽<sup>やう</sup>軍<sup>ぐん</sup>鑑<sup>かん</sup>小<sup>せう</sup>  
云<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>也<sup>や</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>た<sup>た</sup>ら<sup>ら</sup>ば<sup>ば</sup>一<sup>いつ</sup>年<sup>ねん</sup>記<sup>き</sup>詳<sup>しやう</sup>な<sup>な</sup>ら<sup>ら</sup>ば<sup>ば</sup>猶<sup>なほ</sup>後<sup>ご</sup>と<sup>と</sup>云<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>

織<sup>お</sup>田<sup>でん</sup>殿<sup>でん</sup>大<sup>おほ</sup>小<sup>せう</sup>悦<sup>え</sup>ひ<sup>ひ</sup>あ<sup>あ</sup>ひ<sup>ひ</sup>山<sup>さん</sup>口<sup>くち</sup>戸<sup>こ</sup>部<sup>ぶ</sup>が<sup>が</sup>間<sup>ま</sup>は<sup>は</sup>事<sup>じ</sup>起<sup>おこ</sup>る<sup>る</sup>べ<sup>べ</sup>と<sup>と</sup>是<sup>これ</sup>と<sup>と</sup>伺<sup>うか</sup>ひ  
居<sup>い</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>と<sup>と</sup>山<sup>さん</sup>口<sup>くち</sup>左<sup>さ</sup>馬<sup>ま</sup>助<sup>すけ</sup>戸<sup>こ</sup>部<sup>ぶ</sup>が<sup>が</sup>書<sup>しよ</sup>狀<sup>じやう</sup>と<sup>と</sup>信<sup>しん</sup>じて<sup>して</sup>誠<sup>まこと</sup>に  
逆<sup>さか</sup>心<sup>こころ</sup>あり<sup>り</sup>と<sup>と</sup>お<sup>お</sup>ひ<sup>ひ</sup>是<sup>これ</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>殊<sup>こと</sup>更<sup>さら</sup>我<sup>われ</sup>と<sup>と</sup>討<sup>う</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>なる<sup>る</sup>由<sup>よし</sup>奇<sup>き</sup>怪<sup>かい</sup>之<sup>これ</sup>  
と<sup>と</sup>心<sup>こころ</sup>中<sup>ちゆう</sup>小<sup>せう</sup>怒<sup>い</sup>り<sup>り</sup>片<sup>ぺん</sup>時<sup>じ</sup>も<sup>も</sup>捨<sup>すて</sup>置<sup>お</sup>け<sup>け</sup>と<sup>と</sup>非<sup>ひ</sup>ど<sup>ど</sup>と<sup>と</sup>此<sup>こ</sup>書<sup>しよ</sup>狀<sup>じやう</sup>と<sup>と</sup>持<sup>もち</sup>て<sup>て</sup>急<sup>いそ</sup>ぎ  
駿<sup>すま</sup>州<sup>しゆ</sup>へ<sup>へ</sup>と<sup>と</sup>下<sup>くだ</sup>り<sup>り</sup>今<sup>いま</sup>川<sup>がわ</sup>義<sup>ぎ</sup>元<sup>げん</sup>へ<sup>へ</sup>右<sup>みぎ</sup>の<sup>の</sup>次<sup>じ</sup>第<sup>だい</sup>残<sup>ざん</sup>ら<sup>ら</sup>ば<sup>ば</sup>上<sup>うへ</sup>戸<sup>こ</sup>部<sup>ぶ</sup>が<sup>が</sup>  
書<sup>しよ</sup>狀<sup>じやう</sup>と<sup>と</sup>出<sup>い</sup>し<sup>し</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>小<sup>せう</sup>義<sup>ぎ</sup>元<sup>げん</sup>と<sup>と</sup>め<sup>め</sup>此<sup>こ</sup>書<sup>しよ</sup>狀<sup>じやう</sup>偽<sup>ぎ</sup>筆<sup>ひつ</sup>あり<sup>り</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>もの<sup>もの</sup>を<sup>を</sup>さ<sup>さ</sup>ぞ  
不<sup>ふ</sup>便<sup>べん</sup>なり<sup>り</sup>  
孫<sup>そん</sup>子<sup>し</sup>小<sup>せう</sup>間<sup>ま</sup>は<sup>は</sup>五<sup>ご</sup>種<sup>しゆ</sup>あり<sup>り</sup>郷<sup>きやう</sup>間<sup>ま</sup>内<sup>ない</sup>間<sup>ま</sup>反<sup>はん</sup>間<sup>ま</sup>死<sup>し</sup>間<sup>ま</sup>生<sup>せい</sup>間<sup>ま</sup>是<sup>これ</sup>なり<sup>り</sup>又<sup>また</sup>漢<sup>かん</sup>  
の<sup>の</sup>陳<sup>ちん</sup>平<sup>へい</sup>間<sup>ま</sup>を<sup>を</sup>用<sup>もち</sup>ひ<sup>ひ</sup>と<sup>と</sup>楚<sup>そ</sup>の<sup>の</sup>范<sup>はん</sup>增<sup>しやう</sup>と<sup>と</sup>去<sup>き</sup>の<sup>の</sup>術<sup>じゆつ</sup>楚<sup>そ</sup>の<sup>の</sup>使<sup>し</sup>者<sup>しや</sup>小<sup>せう</sup>范<sup>はん</sup>增<sup>しやう</sup>陳<sup>ちん</sup>  
平<sup>へい</sup>小<sup>せう</sup>送<sup>そう</sup>る<sup>る</sup>書<sup>しよ</sup>と<sup>と</sup>示<sup>し</sup>せ<sup>せ</sup>と<sup>と</sup>此<sup>こ</sup>范<sup>はん</sup>增<sup>しやう</sup>の<sup>の</sup>書<sup>しよ</sup>決<sup>けつ</sup>と<sup>と</sup>偽<sup>ぎ</sup>筆<sup>ひつ</sup>あり<sup>り</sup>  
戸<sup>こ</sup>部<sup>ぶ</sup>が<sup>が</sup>書<sup>しよ</sup>狀<sup>じやう</sup>の<sup>の</sup>類<sup>るい</sup>あり<sup>り</sup>

義元おと大に怒り再應の吟味も及ばず戸部を討取つる  
て成山口ふゆるされたることをうろたふれ山口得たりと詞を  
工の某織田へ歸降せしもかやうの變を伺はん為めてゆ  
えたるは某嫡子九郎次郎清洲ありこの使とて此書  
状と奪はれしはゆるやすすむやき信長九郎次郎成のまゝに  
さし置中へ願はく九郎次郎と呼取て後父子一處少く  
戸部を討取やべしとあき口説くも義元をいともあつち  
山口が計略はあつちと許容ありしを山口大に喜び駿  
府を立ち鳴海へ歸り直に密使と清洲へ遣し九郎次郎は  
いふもして清洲を出る此方へは歸るべしと中送る九郎  
次郎は此間の始末夢もも知ばた清洲城が人の計策行

とれど木下が為し三日も修理出来しと父は約せし方便  
相違せし由を鳴海へ告んとおれども城門の出入嚴重ありし  
卒忽に家来と出ばをたうに透を伺いやうし家来一人飛  
脚は仕立鳴海へ遣はると出立をゆるふりてより木下が  
謀めて城門出入の士卒を改め置つることをばたちらふ山口  
が飛脚の出しと木下は告木下心得その飛脚の跡を追  
たれと捕らる書状を取上そのらいつめ山口が家と用心し  
けしはこの事と鳴海へ告ると成得む又左馬助の使とも城  
門の外へ擲めし即ちその状を奪い取しこれをみれば九郎  
次郎はいふもして鳴海へは歸せしとの文あり木下は  
ことを謀成就して山口我子とすしつて後戸部を討んと

大月巳口編六一四

すると聞えりふとてとてりごとく我々あはとて織田殿へ  
 二通の書状を出して具ふその計略を述べしかば織田殿も其  
 意を得ぬ九郎次郎が書状を似せし某いふもして清洲  
 と出ゆべしとて戸部を早く討取むべし某とすくもせむん  
 とて遅くなすいふ内小戸部まといひぬる謀成めぐらさんも知  
 らず油断こそ大敵るれ片時もなやなく災の根を截むへ  
 と書あるとて戸部が使者を呼出し汝は何處の者なる  
 かと尋ぬると當國犬山領の土民なりと答ふ  
 犬山織田信秀の弟津田與次郎信康の領なり信康  
 天文三年九月十二日稻葉山の合戦に討死しこの比に信長  
 の姉婿津田十郎左衛門清信の代あり

木下いづく然らば汝は織田家の百姓なり山口左馬助元より  
 織田家重恩れしゆと却て織田家を亡がし主君を討んと  
 するものなり人面して獸心と云べし汝もまた去家を奉公し  
 かりとめふも父や母の主君とたのむ殿は向ひ仇をあさんと  
 する使に立しむば天罰のがれぬ捕へられりて汝が素性  
 も知し上は汝が故郷の父母兄弟いふ及む六親眷族一  
 人ものぞく其罪のがれぬとて道理よくき心も父母兄  
 弟は傷むとてかたじけなく詰むば彼者色を變て振ひ出し誤  
 ら山口の家を仕てゆべしとて此る使も當りてい元より  
 山口殿乃反逆ありいもよる誠は殿の御内人と存じて罷  
 在りし何とて父母兄弟の者乃御咎を受んとて心安



存じゆべさいうもい〜某も罪とのがれ父母兄弟も安  
穩るべき様の御計らひと仰ぎ奉るよ〜又他事を泣く  
中出さば木下いづもはと我有べきことなり只今迄の罪過  
とのがれ父母兄弟の安穩る〜ん〜願て殿より仰付ら  
る御用と勤むべきやい〜と云彼者仰まてもるゆ何事  
によらば父母兄弟安穩よ我身と故るゆ〜と仰は従ひゆ  
べ〜とや水木下聞て神妙の中條あり然者此書状を鳴海へ  
持参し九郎次郎が返事小は〜と左馬助は渡〜それより直  
小故郷大山へ逃と〜る〜その時恩賞ハ沙汰〜と〜と懇  
にやあめ木下同道して大山に到り彼者の父母兄弟を尋  
出しこれ番を附汝〜約束の〜と〜忽に父母兄

弟と害と〜と約して即使し出立しり  
孫子小いゆゆる死間といふは是なり清洲より小牧  
樂田羽黒と〜と大山に至り大山より又羽黒樂田小牧  
牛山名護屋古渡熱田と〜と鳴海なり  
彼者鳴海へ立歸り山口は件の書状と出さ山口の書状  
を披見し謀書ありとは夢も志はば戸部を亡  
ゆ〜とあるを以て俄に智多の郡小ある今川家の諸  
將を催促し〜のめ〜評定しけるハ戸部が謀叛す不  
如斯駿府より誅罰を〜由に既許され〜は〜も  
某謀を廻ら〜透と見合討〜棄んと内々支度〜ゆ〜  
ども彼戸部さ〜のなれは穩便に討とあるゆ〜然らば

大岡日記編卷十四

十三

つづくの勢と合せ一味同心は笠寺へ押寄戸部を討亡し  
今川殿乃御感預るべしと定めけしむも然るべしと  
一決し惣勢三千餘騎山口左馬助と大將とて同年四月  
十日の晩方より笠寺を押寄無二無三小攻立る

永禄二年四月十日のこゝへは太閤廿四歳の時之信長公  
廿六歳森三左衛門可成廿三歳と知べし

戸部新左衛門智勇兼備の英雄あとも不意のこゝれ  
は大驚き寄手誰や意趣をいふやといふ間もあはせ  
乱入し切し廻しを新左衛門よりひ着間も形く鐘追取て  
くしと出突ふせし防戦へとも敵の大勢味方小勢意猛  
くおのひるがう在合侍どももく討死しつれ共新左衛門

むうりい手も負む従横は働さるがう寄手は山口と見る小  
何の意趣あはくは振舞どやと呼しれは山口が徒兵聲  
小戸部新左衛門汝が謀反あはれ故今川殿より誅戮  
とてその仰により山口左馬助討手小向より尋常小首  
とのく刃を請よとのくしとあはせし讒者の所為なる  
庵し今川殿の家運乃末とあはせしれ忠臣むらり  
人のこめは覆るる存命して主家の滅亡を見んと歎きの  
中乃歎き快よく討死すべしとて居間小くし歸り腹  
あき切て死しけりその家亡ぶる時柱石損むとむべし  
うね今川家亡ぶる始ふまは忠臣無二の戸部ほらびり  
けり

重修真書太閤記初編卷之十四終

重修真書太閤記初編卷之十五

山口父子後悔恐怖の事

并北畠具教尾州攻評定乃事

一計と行つて百計を得るとは明智のふと處之木下藤吉郎  
山口父子の反心と察し却て彼を用ひて今川家の柱石と  
失ふはいめんそ成謀りに首尾よくその功なりけり  
智謀ふく武勇の聞え高き戸部新左衛門山口左馬  
助がなめ減亡しはとも笠寺の砦を守るとの形山口  
左馬助鳴海よりかへ持てこられけり自然と廢城と  
なりて織田家れ有るにたり是藤吉郎が方寸より

出<sup>いで</sup>一<sup>い</sup>処<sup>こ</sup>あ<sup>は</sup>と<sup>も</sup>も表<sup>ひ</sup>立<sup>た</sup>ら<sup>る</sup>こと<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>ず<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>ず<sup>も</sup>孫<sup>まご</sup>織<sup>お</sup>田<sup>の</sup>家<sup>の</sup>の諸<sup>しよ</sup>士<sup>し</sup>誰<sup>たれ</sup>  
あり<sup>と</sup>く<sup>も</sup>あ<sup>は</sup>れ<sup>と</sup>知<sup>し</sup>る<sup>もの</sup>なり<sup>し</sup>織<sup>お</sup>田<sup>の</sup>殿<sup>の</sup>戸<sup>の</sup>部<sup>の</sup>新<sup>しん</sup>左<sup>さ</sup>衛<sup>ゑ</sup>門<sup>の</sup>が討<sup>う</sup>と  
し<sup>る</sup>こと<sup>も</sup>聞<sup>き</sup>く<sup>士</sup>卒<sup>そ</sup>と<sup>も</sup>勞<sup>らう</sup>を<sup>も</sup>矢<sup>や</sup>石<sup>せき</sup>と<sup>も</sup>費<sup>ひ</sup>さ<sup>る</sup>敵<sup>てき</sup>と<sup>も</sup>以<sup>もつ</sup>て<sup>も</sup>敵<sup>てき</sup>と  
亡<sup>な</sup>ら<sup>る</sup>こと<sup>も</sup>居<sup>ゐ</sup>る<sup>一</sup>若<sup>わ</sup>と<sup>も</sup>得<sup>え</sup>る<sup>こと</sup>心<sup>こ</sup>地<sup>ち</sup>と<sup>も</sup>手<sup>て</sup>と<sup>も</sup>拍<sup>ち</sup>  
く<sup>も</sup>大<sup>おほ</sup>笑<sup>わら</sup>む<sup>こと</sup>なり<sup>し</sup>山口<sup>の</sup>又<sup>また</sup>戸<sup>の</sup>部<sup>の</sup>が首<sup>くび</sup>と<sup>も</sup>駿<sup>しん</sup>州<sup>の</sup>へ送<sup>おく</sup>り<sup>遣</sup>り<sup>し</sup>  
軍<sup>い</sup>の始<sup>は</sup>末<sup>まつ</sup>と<sup>も</sup>注<sup>ちゆ</sup>進<sup>しん</sup>を<sup>も</sup>ば<sup>り</sup>義<sup>ぎ</sup>元<sup>げん</sup>山<sup>の</sup>口<sup>の</sup>が軍<sup>い</sup>功<sup>こう</sup>と<sup>も</sup>賞<sup>しょう</sup>美<sup>び</sup>戸<sup>の</sup>部<sup>の</sup>が  
一<sup>いつ</sup>跡<sup>せき</sup>と<sup>も</sup>没<sup>ぼつ</sup>収<sup>しゆ</sup>し<sup>る</sup>妻<sup>さい</sup>子<sup>し</sup>と<sup>も</sup>追<sup>つ</sup>放<sup>ほう</sup>を<sup>も</sup>戸<sup>の</sup>部<sup>の</sup>が嫡<sup>ちやく</sup>子<sup>し</sup>新<sup>しん</sup>十<sup>じゆ</sup>郎<sup>らう</sup>今<sup>いま</sup>年<sup>ねん</sup>廿<sup>に</sup>二<sup>に</sup>  
歳<sup>さい</sup>と<sup>も</sup>形<sup>かたち</sup>を<sup>も</sup>父<sup>ちち</sup>が討<sup>う</sup>死<sup>し</sup>の<sup>よ</sup>り<sup>も</sup>成<sup>な</sup>り<sup>し</sup>と<sup>も</sup>の<sup>ま</sup>駿<sup>しん</sup>州<sup>の</sup>と<sup>も</sup>立<sup>た</sup>退<sup>たい</sup>き  
し<sup>る</sup>こと<sup>も</sup>な<sup>ら</sup>ず<sup>も</sup>出<sup>い</sup>奔<sup>ほん</sup>し<sup>る</sup>身<sup>み</sup>と<sup>も</sup>山<sup>の</sup>林<sup>の</sup>か<sup>へ</sup>り<sup>し</sup>父<sup>ちち</sup>が無<sup>む</sup>實<sup>じつ</sup>の<sup>つ</sup>罪<sup>つみ</sup>と<sup>も</sup>陷<sup>おち</sup>  
し<sup>る</sup>こと<sup>も</sup>成<sup>な</sup>り<sup>し</sup>こと<sup>も</sup>あり<sup>し</sup>て<sup>も</sup>父<sup>ちち</sup>の<sup>あ</sup>仇<sup>あひ</sup>と<sup>も</sup>討<sup>う</sup>と<sup>も</sup>の<sup>あ</sup>冤<sup>えん</sup>と<sup>も</sup>雪<sup>ゆき</sup>め  
し<sup>る</sup>こと<sup>も</sup>謀<sup>くわ</sup>り<sup>し</sup>る<sup>こと</sup>なり<sup>し</sup>又<sup>また</sup>今<sup>いま</sup>川<sup>の</sup>家<sup>の</sup>乃<sup>の</sup>老<sup>らう</sup>臣<sup>しん</sup>等<sup>ら</sup>日<sup>ひ</sup>比<sup>ひ</sup>戸<sup>の</sup>部<sup>の</sup>が誠<sup>せい</sup>忠<sup>ちゆう</sup>と

知<sup>ち</sup>る<sup>こと</sup>の<sup>は</sup>此<sup>こ</sup>度<sup>た</sup>の<sup>一</sup>件<sup>けん</sup>不<sup>ふ</sup>審<sup>しん</sup>あり<sup>し</sup>新<sup>しん</sup>左<sup>さ</sup>衛<sup>ゑ</sup>門<sup>の</sup>の<sup>道</sup>理<sup>り</sup>も<sup>も</sup>明<sup>あ</sup>  
ら<sup>る</sup>こと<sup>も</sup>忠<sup>ちゆう</sup>義<sup>ぎ</sup>一<sup>いつ</sup>徹<sup>てつ</sup>と<sup>も</sup>の<sup>あ</sup>れ<sup>は</sup>勿<sup>な</sup>く<sup>も</sup>送<sup>おく</sup>心<sup>しん</sup>と<sup>も</sup>企<sup>き</sup>け<sup>る</sup>者<sup>もの</sup>に<sup>あ</sup>ら<sup>ず</sup>  
必<sup>ひつ</sup>定<sup>てい</sup>奸<sup>けん</sup>人<sup>にん</sup>の<sup>所</sup>為<sup>ゐ</sup>る<sup>こと</sup>と<sup>も</sup>あり<sup>し</sup>と<sup>も</sup>山口<sup>の</sup>が訴<sup>う</sup>へ<sup>出</sup>し<sup>る</sup>  
比<sup>ひ</sup>義<sup>ぎ</sup>元<sup>げん</sup>怒<sup>い</sup>強<sup>きやう</sup>く<sup>も</sup>一<sup>いつ</sup>座<sup>ざ</sup>の<sup>評</sup>定<sup>てい</sup>も<sup>も</sup>不<sup>ふ</sup>及<sup>じつ</sup>直<sup>ちき</sup>に<sup>も</sup>山口<sup>の</sup>が討<sup>う</sup>手<sup>て</sup>と<sup>も</sup>ゆる  
され<sup>し</sup>ゆ<sup>も</sup>家<sup>の</sup>老<sup>らう</sup>臣<sup>しん</sup>も<sup>も</sup>乃<sup>の</sup>中<sup>ちゆう</sup>あり<sup>し</sup>事<sup>こと</sup>の<sup>始</sup>末<sup>まつ</sup>と<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>ぬ<sup>もの</sup>も<sup>も</sup>多<sup>おほ</sup>く  
諫<sup>かん</sup>言<sup>げん</sup>と<sup>も</sup>さ<sup>ら</sup>間<sup>ま</sup>も<sup>も</sup>な<sup>ら</sup>ず<sup>も</sup>新<sup>しん</sup>左<sup>さ</sup>衛<sup>ゑ</sup>門<sup>の</sup>が首<sup>くび</sup>級<sup>きゆう</sup>到<sup>たう</sup>著<sup>しやく</sup>に<sup>あ</sup>ら<sup>ず</sup>  
大<sup>おほ</sup>小<sup>せう</sup>驚<sup>おど</sup>き<sup>し</sup>戸<sup>の</sup>部<sup>の</sup>新<sup>しん</sup>左<sup>さ</sup>衛<sup>ゑ</sup>門<sup>の</sup>の<sup>智</sup>勇<sup>いゆう</sup>兼<sup>けん</sup>備<sup>び</sup>く<sup>も</sup>當<sup>たう</sup>家<sup>の</sup>股<sup>こ</sup>肱<sup>わく</sup>の<sup>老</sup>臣<sup>しん</sup>に  
勿<sup>な</sup>く<sup>も</sup>逆<sup>さか</sup>心<sup>しん</sup>と<sup>も</sup>す<sup>べ</sup>き<sup>こと</sup>の<sup>あ</sup>ら<sup>ず</sup>は<sup>り</sup>一<sup>いつ</sup>通<sup>つう</sup>の<sup>書</sup>翰<sup>ぼん</sup>と<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>ず<sup>も</sup>一<sup>いつ</sup>應<sup>おう</sup>の  
吟<sup>ぎん</sup>味<sup>み</sup>も<sup>も</sup>邪<sup>じや</sup>く<sup>も</sup>誅<sup>しゆ</sup>戮<sup>りやく</sup>と<sup>も</sup>加<sup>か</sup>え<sup>る</sup>こと<sup>も</sup>あり<sup>し</sup>と<sup>も</sup>山口<sup>の</sup>が卒<sup>そつ</sup>忽<sup>くつ</sup>あり<sup>し</sup>  
山<sup>の</sup>口<sup>の</sup>と<sup>も</sup>今<sup>いま</sup>御<sup>ご</sup>味<sup>み</sup>方<sup>はた</sup>に<sup>あ</sup>り<sup>し</sup>こと<sup>も</sup>元<sup>げん</sup>來<sup>らい</sup>の<sup>織</sup>田<sup>の</sup>家<sup>の</sup>の<sup>侍</sup>者<sup>しやく</sup>なり<sup>し</sup>こと<sup>も</sup>  
心<sup>こ</sup>さら<sup>ず</sup>は<sup>り</sup>打<sup>う</sup>と<sup>も</sup>け<sup>難</sup>戸<sup>の</sup>部<sup>の</sup>今<sup>いま</sup>川<sup>の</sup>累<sup>らい</sup>代<sup>だい</sup>の<sup>功</sup>臣<sup>こうしん</sup>之<sup>の</sup>新<sup>しん</sup>附<sup>ふ</sup>降<sup>かう</sup>參<sup>さん</sup>乃

大田言不終

二

山口と一様は思召さるべきにあはばそれ既小事果れば  
為方ふしせめく新左衛門が父祖代の忠勤をおがめされ  
妻子と召返され御扶助ありき然るべしといふめ宥むる  
ものも多かりしゆを義元やうく思返し後悔の氣色を  
老臣等の中におらせ妻子をそれし扶助を加へ出奔し  
新十郎とせんさくも形さでそのまゝにさし置とせん

一説は戸部新左衛門笠寺戸部山崎と知行きし人  
あて山崎村より出し人と云ある今川義元のため  
三州吉田に於て誅せしむる子新十郎今川  
旗下と立退武田家は仕へ上野利根郡に住せしむ  
山口左馬助今度の働さ格別の忠功なれば戸部が二跡と鳴海

は并を領さるべきより定めしむるさあはとも賞翫定めて  
尋常かすとりたりいふ家老等が諫言によりて山口が讒言  
あやと思ふ人も多かりしゆは山口をりてさやほものる  
結句心と置やうに見えしゆは山口心中更またのうらむ  
し日城暮しよりあるに山口が下部清洲の使と仕終りて  
のち藤吉郎と約せし有鳴海の城をぬけ出古郷犬山へ  
立歸りたり藤吉郎その父母乃禁せしむ彼ものるを褒  
美とあはしめけり山口九郎次郎いめしむるもあはばありき  
父左馬助兵を發して笠寺の砦を攻落し戸部新左衛門を討  
つる由を聞いける故とも知ざりしゆは覺束あく案どなき  
尋ぬることもなき何とぞん我身れ上も氣遣し

これも世と怖まゝありける織田殿九郎次郎と誅せよ  
やと思召されと藤吉郎おとめ彼と誅しては左馬  
助必定ま今川家へ立歸り無二の戦とありは左は是又  
味方小取災の根と生さるる似たり但このま打棄置か  
る左馬助より九郎次郎と呼取てその時知ぬありあり  
九郎次郎と逃返しては九郎次郎鳴海へ入り付父子  
對面しては戸部と打つるの始末明白なる此方より  
の謀計とては定め後悔せざるべし  
今川家此首尾も自然ととらふなり山口を疑ふ者多く  
ありぬべし山口とては駿河へたやと出仕もあ  
まじけし當方へ眞實に歸參する又謀反して自滅する

二の道より外あるま然らば九郎次郎と助て置ても  
何れど此事を仕出せば萬一の志を改め父子とも小  
當方へ降參せばは二人の味方と設くるなり毒藥變ド  
く藥とあるとわめるとは中と諫め織田殿  
はとふさと思はれ何の沙汰も及ばぬわは  
山口左馬助忍び使を以て九郎次郎へ中送るなり戸部と討  
一の何とやら世の中心落居にいろなる變のあらんも計  
が透と見合逃るる中送りわは九郎次郎も子  
細と知らば怖畏をいづく折節あは大にあて逃る  
らんと支度とては整へ透と伺い居るなり元より逃  
はあげよと態と油断せし躰にりてあは九郎次郎よき隙

大岡巴の編一五

四

と終り清洲とのれ出く鳴海とさくくい我きさく

清洲より名護屋とて鳴海まで四里餘あり然ると一説

つち山口九郎次郎むとく一色川と舟とて海東郡江松追

下りそれより宮小至りとも云や江松小九郎次郎と

乗せ立退しもの子孫ありと聞い誠り

九郎次郎鳴海は歸り着左馬助小對面何故戸部と打取

らひやらん又何故のれ歸とは仰あさるるん

尋ぬま左馬助大不審戸部が謀反のより汝が奪取し

書状とて明白なるより駿河へ注進し今川家の下知

より押寄討取り汝も跡より逃歸すべしとち中越

はととも隙入りの災あんと思ひをり透を見合逃歸べし

やせしこと云により九郎次郎更にいんちを先以

某が奪取し戸部が書状とい何なるものやあひも寄

らばとい左馬助あまが絹小包し戸部が書状

使者の掌中に書し絹とさく父が刀とゆるあざりし

ことどもく語り語ども九郎次郎一向は覺もるき次第

なりそれこそ織田殿の反間するが某より一度も書状

らせしとなく使者と出したることもいふにやにより左馬

助あされく叔信長に謀らさく戸部が書状は駿河

に進上してすふる汝が書状はにありこれ見よやとて

取出をみるに實に九郎次郎が手跡は相違なき酒でよく

似たり九郎次郎も是とさくやりあされ惑ひ時

左馬助がいくと我信長と謀らんごとく却く彼小をうられ  
考り志々のこ形近處といひ智者といひ無双の味方と失  
ひいと我をうと恥けし今川殿より某がやせりまゝ戸部が  
書状の證據となり怒たるに某討手をゆるしあひ  
つとども今まで戸部が一跡の沙汰及むれざるは某が所業を  
疑ひあつと見たり今その實とあるといふもかりとも言出  
がさし考り戸部が謀反と實となりかくべき形りさりと  
はうるき人の口ふをいふ今ふとあまことの事義元の耳に入るは  
いよく父子は身上安穩なるやと晝夜もむひといふ安き  
心もあうりけふ

山口左馬助駿河の後援を頼り清洲と襲んとさうりに

今駿河の首尾と損ぜしを以て後援あるべし理る却  
り清洲乃仇成増ふいさるこれ山口父子の安穩なるべし  
所以あり

織田殿の木下が申旨にまうせて九郎次郎清洲を逃し歸  
り後更ふこれを追ふもせばあつて顔よのそ過されり  
けり然るに同年四月中旬勢州の國司北畠大納言具教  
卿前より尾州を斬取んとおりの居らとさうり自國のこと  
多く果さる

伊勢國司と云は北畠權大納言雅家卿を始とて雅家  
卿の長子權大納言師親卿の子權大納言師重卿を  
子准三后親房公まで四代相續乃國司あまとも大うり

大目己の痛夫一



在京るり然る小親房公の時朝家南北と分と天下百  
 も安き時かりり伊勢國司の南朝方より親房公の  
 三男右大臣准三宮顯能公多く在國國中乃兵  
 馬と管領せられし之子顯俊とを木造の祖と  
 顯俊の弟權大納言顯泰卿國司六代の統と承繼れり  
 顯泰卿の次大納言滿雅卿の次大納言教具卿の次  
 大納言政郷卿の次大納言材親卿の次大納言晴具  
 卿の次大納言具教卿なり具教卿永祿二年ハ三十二  
 歳より同十三年入道して不知齋と云  
 其内小信長の威勢段々盛より尾州を大略切鎮め  
 と聞えけし具教を思はれ斯くハ彼國を切

取とあるふまどきなり信長のつと一國平均におさめざる内  
 大軍を以て押寄短兵急を責立る味方の兵馬多くて  
 強つた十二代調練の勁勇なり敵を小勢しり志も練  
 練いも熟と備勢州兵士必勝の時あるべしと心中決定  
 子息新國司左少將具房朝臣と云り  
 具教卿の長子具房朝臣今年八歳之母ハ六角定頼朝臣の  
 女なり太肥御所と云ハ是也  
 一族旗下と呼集め尾州を斬取んとて評定と時家老森  
 本飛驒守すみ出  
 北畠家記ハ一志郡森本住人村上源氏森本飛驒守同  
 彦市郎ともゆ森本ハ一志郡登坂山の北あり雲津川の

南の二條の東北にあつた

御評定尤よはたはらしく信長の行状を伺ひし武勇拔群の  
 とい中追もはる智謀尋常を越えりいふ大敵をも  
 といのあどをもとむ向ふ処に必破り戦ふ処に勝利を得むと  
 云々然る小勢ありとて侮まざりといふんや尾州へ  
 向ふせあふは堺小佐屋の大川あり味方敵地に入りし戦  
 利なく引さるとする時容易小退がさるべし敵とあはる  
 と乃い亡びとやそのゆより御思慮あるべしなりとや  
 此項北畠具教卿ハ伊勢國多氣郡田丸小在城あり田丸より  
 松坂雲津阿濃津上野白子神戸四日市桑名と經る佐屋  
 川むこすのぐ廿二里及ぶ

具教聞て我尾州を望む事此度初ての事よあはる年来の志  
 願なりはとも分國事多くて打過ぬると近比本意は非  
 信長武威ふやると云々もこの家此頃までも斯波の家臣之  
 誰う甘んじてその下風よ立ん當家の十二代位ハ二品官ハ大臣  
 大納言よいころ処の名家之元より對揚をばにあり孫ども  
 二葉あり剪ざれば終は鉄鉞を用ふと云とあり彼万二尾張  
 一國を平均ありあむたやすく征伐ありやさるべし今取  
 どんは何もの日我望と達とふき既はおりの立ぬるところ  
 るれを今更是を變むべきにあはる只軍の評定を案ばべしと  
 中さけりば此上いして皆其義小同む時小鳥屋尾石見  
 守が云く織田信長ハ勇氣猛烈よして敵を恐るといふと

る。無體に進む氣質なりと聞ゆ。味方よろしく奇謀  
と以て向ふ。忽ち信長を打取べし。某が愚案。味方一手と  
正兵として真一文字に佐屋川を渡り。尾張國へ攻入し  
き。或るは信長定め川をさし出張して爰を詮と防  
戦ふべし。叔母。味方逞兵とす。ゆゑに二手とあり。川より  
東に埋伏し。置信長荒氣。攻出。川を渡りて攻め。かべ。其時  
正兵のむと打負敗走とす。然るに信長の小乗を追来ん  
時。味方の伏兵一度起り。攻立る。信長を初とす。川を  
渡り。兵を一人も残さば討取んと案の内あり。信長を討  
討取る。ば尾州の戦とす。御手小屬とす。と聞ゆ。す。く  
述。く。く。く。

北畠家舊記と檢する。鳥屋尾石見守。藤原氏なり。  
鷲尾家の庶流と云。伊勢飯高郡富永城主。北畠家  
四家老。乃一なり。同姓。小平太兵衛少輔。右近將監。與左  
衛門佐兵衛。なと云あり。  
具教卿。大小感悦あり。是究竟の謀あり。とゆ。兵を神速を  
貴む。とゆ。  
孫子。小兵之情。神速を主とす。と云。吳子。小兵を用ゐるの害  
猶豫と最大とす。と云の意あり。  
くやく用意とす。とて。鳥屋尾の軍議。は同意。く軍の  
手配とす。とす。れ。く。り。ま。げ。新國司。具房朝臣。と惣大將と  
く。く。五千余騎。佐屋川のこる。こ。小陣とす。く。ふ。ふ。と。正兵

と次は安保若狹守を大将とて八千余騎川上へ埋伏  
させ

北畠記に安保若狹守は平城天皇の後胤とて大枝氏之  
伊賀國名張の城主より子孫今伊勢一志郡一志村あり  
まゝ一手に磯田弥之助を大将とて八千余騎おる川下へ  
埋伏し置

北畠記に磯田弥之助後小彦右衛門とて宇多源氏なり  
伊勢飯高郡丹生の住人

あれは具房朝臣の旗本より軍とて双方入つて戦  
つんとて合圖次第兩方より討つて出尾州勢の後をたち  
切つて戦つて定めらる森本飛驒守と鳥屋尾石見守と

國主の旗本にありし時よのぞも機は從ひてとらふべし  
と具敷卿直ぐ小下知せられ惣勢二万余騎伊勢飯高郡  
大河内の城を進發して尾州へ向はれり

大河内より松坂雲津阿濃津上野白子神戸四日市桑  
名まぐ十九里小ちりあれと二万余騎を三日は押  
とて其人數割とて一騎は三人宛とて六万三千  
人なり三騎ありて五間とて五百八十三町余あり  
十六里七町余ありと知べし

織田信長佐屋川へ出張の事

并木下藤吉郎進退乃勝敗を説事

永祿二年四月十七日勢州の大軍尾州を襲ふため

木下藤吉郎廿四歳信長廿六歳の時るり  
出陣して先勢すて小桑名は著より追く清洲へ注進せし  
かば織田殿大に怒りあふく宣ふやう伊勢と尾張を大河  
と堺の滄海とをぬぐる隣國あはれ此方より一度も馬とすあ  
一と形々とは露やども怨と結びむとむるよとどがなり然  
る小彼方より大軍を發して我國へ向ふときく誠うたの儀  
いふも不當りた速に馳向く追ふきよなたく敵一人なり  
とも佐屋川と渡りて伊勢武者は我領分とふませんこと  
いふあはれ無念なりとや川をさへ出陣して防戦の用意と  
あせや者どもと即時は觸りてこれ摠勢五千餘騎佐屋川  
はし進ませり清洲の留守する織田大隅守信廣とのと

おのれ

織田大隅守信廣は信長別腹の兄あはれ小字ハ三郎五郎と  
云天正二年七月長島合戦に討死せしと云  
柴田佐久間坂井池田ととめ勇烈無雙の兵士と引卒佐  
屋川小至りて陣をとり川よりあること見させは勢州乃  
軍兵五千むり國司の旗印を立ち整くと備へり信長は  
か敵の陣乃とり様を窺ひて諸將をあつめ評定あり  
ける北畠大納言は數代伊勢の國司とて勢近國は振へ  
ども元來弓馬の家小は軍乃差配もさあはれ其一族  
旗下の諸士やても武勇拔羣れ者ありときくは其の領地  
廣く人數の多きものなまばらしく恐るに足らぬと思ひ

今日川むみの敵を見まはるの勢五六千にまぐべうはあり  
に小勢あり様子こそ有べし油断をべうは但味方五千餘  
騎は敵五六千まことに對の勢あるとも我軍勢は日比  
繰練しつるのまぐは度事に出會うと刃をまぐつるもの  
めて我軍兵一人を以て伊勢武者三四人は敵をまぐしてハ  
心安し然るまぐや川を打つて心よく一戦をまぐし尾州武  
者の勇氣をまぐれば敵一まぐへもまぐつて退去まぐべし  
まぐや打つまぐせや侍共とまぐれば佐久間信盛すまぐ  
出まぐけるは北畠どの公家より出て弓箭の道ふまぐると  
云とも先祖鎮守府將軍陸奥出羽按察使大納言顯家  
卿若年まぐ陸奥國は下向一度は大軍を發し所は小

合戦しつる重代の勇士も耻ぢされは累代拜趨乃衣  
冠を脱去し朝暮との身小甲冑とよろひ終は武勇を以て  
伊勢の國を切從へ當今まぐ既は十餘世ふ及ぶ其旗下まぐ相  
應の勇士あつてい何とて戦場小繁昌すまぐや侮り輕んずる  
と軍乃道は取て危うしつらんや川をまぐせば敵の領地をり  
今小勢のみめれども續く勢も多うまぐし鹿忽れ合戦然  
るまぐべしつる柴田坂井も此義は同く此方小備を堅くして  
渡る敵を拒くべしと諫めたり  
柴田の勝家あり今年卅三歳坂井は右近將監盛種なり  
今年卅一歳たぐし盛種は江州余語住人余語右衛門大夫  
盛政入道梅哲の二男あり佐く内藏助成政の兄あり

信長重祿々宣ひくるは面々の異見一應に尤あれども斯の  
如く出陣し敵渡らば討んと身構して待て何と軍の期と  
なさん徒は數日を送り對陣に氣を屈せし勝負の時あるや  
戦ひ天の運によるといふもまことの人の氣ふよるものなり川と  
渡りて大敵と戦ふんとさむ味方乃銳氣を以て要害城  
前よあてよも渡さざると空たのめを敵に馳合ひ必定切勝  
べしと打負ひ我真先討死し怨を泉下小報せむ  
かやうに日と費さんとあは出陣せざることをまらざるべけれとや  
けるも柴田勝家仰いさるることあれども危きたるは良將  
のこのまらざる処なり軍の運によるとやるが不戦して勝と  
以て名將の譽とあはれ今度の出陣かひる期したるこ

おもはるは敵のよばると聞まはしに打て出で防戦の用意の  
なり此方より進て戦ふに及ぶるは長陣の間小國中乃變  
もたより難し此處は防禦の兵と残され君も御歸城あり  
可然短慮功とあはれと中このゆとやをば血氣よとやる  
若殿原いさる殿の御計いよまらせ軍せさをむと望む者  
も多く評定一決せざるにより信長志むる思案ありて家  
老の面々の軍議をゆり理能聞えされども我心いよ決りかこ  
しの新参の小猿め賢く計らふもの小猿めをとて召  
まされ柴田例よりか乃猿冠者め口より利害を説とも  
大事の軍小馴らふもあは疎忽の御計は諸卒の心と  
迷はれ種るべしと諫むるを信長は彼猿が詞を用る

大層言不終者一三  
まらあはるた進退の吉凶とトもんが為の事と宣ひ  
木下小向をせぬ諸將の評定くの如く進く戦ふを  
又ハ退て待てよや汝心小計らいやと仰らるれば藤吉郎  
夫れどの御評定ハ何ぞとや此度ハ進く戦をせぬと大  
利あり退く敵のゆるを待てぬと大なる災あるべしとや  
進ませぬとやと柴田大は怒聲して汝いうるは左様  
の事成中我や我君壯年にして海血氣ふたやせぬ  
が故に諸老臣の事を諫め奉る処は汝一人進退の機を述て  
我君の御心をまじり奉る事以外の事ありいふは進て利  
あり退く災あるぞ所存との事成中とやと言はれ藤吉郎  
莞尔と笑く生る事いける事の魂なきはあはる魂あれ所存

あり君亦仕ある事の心をつく事を忠義と何とて所存と  
残るべき事あり伊勢の軍勢我國を切取んとするごと  
出陣せしむるが川を小陣を取渡さんとせざるは猶豫  
の氣あり又我君これを防たえ出陣すは直川を  
渡して戦ふと宣は神速の銳氣はゆるまを銳氣を以て  
猶豫の氣は加ふるは必勝乃勢なり殊に軍の大將の心  
よる事の戦ふ  
兵子は敵不當く進て戦とならば義は速なることと云  
義と聞ゆは松下の講成さるれは  
戦ふんと宣は戦ふに去るがよりゆるまを諫奉り  
たとへば命をめらるるも何厭ふと然るを時機を辨へ

大層言不終者一三

一日



志すば猥に我心不まうせしむ奉る誠忠にあはるば  
面々の身乃危ふきと思ひて君の長久を謀りやうせざる  
ハ尤不忠と云ひべし只今此方より川茂渡りて戦を挑  
むこと危ふ似されども我君とて小尾州の軍勢を以て天下の  
亂ときり鎮め四海一統の深慮ありゆきりとも尾州の勢  
を以て伊勢の軍小向ふが危くはいりて尾州を以て天下を  
敵に引つけよふやどの危ふきを何と堪させよふべき危き軍  
小勝するためといふ鎌倉右幕下頼朝卿ハ石橋山までふし  
木の洞におくまもいも後ハ日本此大將軍と仰がれあつり  
足利尊氏軍小打まけ遠く九州まで逃たりしも終小京都將  
軍此大祖とあはせぬ楠正成の赤坂の城と落るとして長崎次郎

う鏃小身と射させしむ不思議小肌またいとも新田義貞  
の旗を擧て鎌倉に發向せしむめいさるる百五十騎これ等  
やどの危ふき小比ぶる今日軍ハ安泰あり志すけあき伊  
勢武者に向ひて危ふきとて引返させよとて尾州勢乃鋒  
く下けし威おとろへ敵はいよく勝よのさるべし勝小のり大  
軍もて鋒く下けし味方と戦たる百度戦る百度やぶられし  
なると終は尾州のよきと成ぬべし是を後の災とやてぬとや  
からしせり此方より無二無三なり渡り伊勢武者と佐屋  
川に切かぎしべし但北畠いりて大軍も小勢もりとも二万  
の軍兵いかけむと聞見渡を勢ハ五千余騎かむりの小勢  
ふく遠く居城を打出ん様ぞなき推量する小一万五六千乃

人数をすつかりこふ伏置我君勇猛ます一海をバ態と小勢  
みて川のあるさに出張一半渡らるゝん時伏勢とあり討んと  
計るとちとたりされバ此方より御勢とてけて伊勢武者れく  
とありさる川の上下蘆あのを志げりくは押よそく一當あつる程  
あつバ敵の計策相違して味方の勝利とありゆべ御陣を引せ  
あつんと近比以る物躰なり日本國を切るげけ天下を御手に  
こつせめんと事なすめ御思案めぐるされゆくと憚る  
所なく辨舌よごぬど述りけり  
此條數本を校合して善本による普通の本と大同小異  
あるべし見る人あやむなれ

重修真書太閤記初編卷之十五終

